

## ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における 日系入植者の社会経済特性の変遷

山下亜紀郎\*・羽田 司\*\*

\*筑波大学生命環境系, \*\*徳山大学経済学部

本稿は、ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における日系入植者たちの社会経済特性について、入植後から現在までの変遷を踏まえながら明らかにすることを目的とする。大規模灌漑果樹農家として成功した先駆的単独入植世帯の事例では、農地を分割しながら世代交代して現在も農業が継続していた。一方、集団入植世帯の多くも、日系農協組織の解散に見舞われながらも、自ら新たな同業者組合を結成したり、個別に集出荷業者と契約したり、海外市場向けの新品種を積極的に導入したりしながら、果樹農業を発展させていた。当地域の日系人コミュニティは、日系人同士の親睦や次世代への日本語・日本文化の継承に大きな役割を果たしてきたが、近年では、日系・非日系の垣根を超えた地域社会の交流を促進し、現地ブラジル社会へ日本語・日本文化を伝道するという、新しい存在意義や役割も付与されていた。

キーワード：日系人、日系コミュニティ、灌漑果樹農業、サンフランシスコ川中流域、ブラジル

### I はじめに

1908年にブラジルへの最初の日本移民が渡伯して、100年以上が経過した。その間に日系人による入植地は、南部のサンパウロ州とその周辺地域から、アマゾンやノルデステ（北東部）といった辺境の地を含めたブラジル全土へ拡大している。こうした、日本からブラジルへ渡った移民の歴史や、各地に入植した日系人たちの入植当時の経緯については、丸山編（2010）や、全5巻からなる『ブラジル日本移民百年史』などといった大著で詳しく述べられている。それらによると、日本からブラジルへの移民は、1920～30年代（戦前移民）と1950～60年代（戦後移民）の2度ピークを迎えるが、1970年代以降になるとそうした移民はわずかとなった。その結果、現在ブラジルに居住する日系人に占めるいわゆる1世の割合は減少し、2世、3世がその主流となっている。

一方でブラジル国内に目を向けると、第二次世界大戦後、とくに1960年代以降、ブラジルの連

邦政府などによって、アマゾン開発計画やブラジル中央部のセラード開発計画、北東部のサンフランシスコ川流域開発計画などにもなう大規模な移住地・植民地が開発され、多くのブラジル在日日系人も農業移民として再入植した（ブラジル日本移民百周年記念協会・日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編、2012）。1960～80年代に北部や北東部に再入植したこれらの日系人たちも、現在では世代交代が進みつつあるものと思われる。

このような世代交代にもなうブラジルの日系人社会の変化として、1958年と1987年の統計を比較した報告によると、農業就業者の減少や農村居住者の激減、日本語話者の減少や日系コミュニティの存在意義の低下などが特徴として挙げられている。さらにそうした日系移民社会の衰退を象徴するかのようには、1994年には日系農協組織の双壁を成していたコチア産業組合中央会と南伯農業協同組合中央会が相次いで解散した（丸山、2010；ブラジル日本移民百周年記念協会・日本語